

JOHA ニュースレター

第40号

日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会 (JOHA19) のご案内

日本オーラル・ヒストリー学会第19回大会 (JOHA19) が 2021年9月5日 (日) に青森公立大学を開催校としてオンライン開催されます。お誘い合わせのうえ、ふるってご参加ください。

【目次】

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第19回大会	III. シンポジウム・ワークショップ報告
大会開催校より	告
1. 大会プログラム	1. シンポジウム報告
第1分科会 (震災・難民)	2. オーラル・ヒストリー複合ワークショップ報告
第2分科会 (戦争・植民)	3. 編集委員会主催ワークショップ報告
2. シンポジウム兼研究実践交流会	IV. お知らせ
3. 自由報告要旨	1. 会員異動
II. 理事会報告	2. 2021年度会費納入のお願い
第9期第6回理事会 (2021年6月6日)	3. 訃報 : 宮崎黎子さん

.....
*ニュースレター掲載のメールアドレスは、(at) 部分を@ に替えて送信してください。

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

I. 日本オーラル・ヒストリー学会 第19回大会

Japan Oral History Association 19th Annual Conference

《大会開催校より》

JOHA 第19回大会は、青森公立大学にてオンライン、オフラインのハイブリッドで開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、昨年同様オンラインのみでの開催となりました。非常に残念ではありますが、また別の機会に青森においていただけたらと考えております。

本大会では、自由報告2部会、総会。シンポジウム兼研究実践交流会を企画しております。また1日に集約するため、2つの自由報告は同時刻に行う予定となっております(9:30~11:30)。午後はシンポジウム兼研究実践交流会として「東日本大震災被災地域住民の語りと聴いて伝える活動」が行われます(13:30~16:30)。東北を舞台とした学会大会にふさわしく、重要なテーマとなっております。こちらの方にも是非ご参加お願いいたします。青森は幸いにして対面授業が可能となっております。そのためオンラインにまだまだ不慣れなため、至らない点も多々あるかと思いますが、ご理解いただければまことに幸いです。

JOHA 第19回大会開催校理事 佐々木 てる (青森公立大学)

開催日: 2021年9月5日(日)

開催方法: Zoom ミーティング

別途、会員宛に Zoom ミーティングアドレスをお伝えします。また、総会などの確定情報についても、随時、会員メーリングリストならびに JOHA ホームページで更新していきます。

参加費: 無料

JOHA19 実行委員会: 佐々木てる 開催校理事、青森公立大学学部生

学会事務局: 矢吹康夫、研究活動委員会委員長: 橋本みゆき、会計: 上田貴子

・大会に関してご不明な点がございましたら、下記までお問い合わせください。

問合せ先: [joha19\(at\)ml.rikkyo.ac.jp](mailto:joha19(at)ml.rikkyo.ac.jp)

◎ 自由報告者へのお願い

1) 自由報告は、報告 20 分・質疑応答 10 分(合計 30 分)で構成されています。

2) 発表開始時に報告者が配信してください。

そのほか詳細は、オンライン開催に伴う確認事項がありますので別途連絡いたします。

JOHA 第19回大会開催校理事 佐々木てる (青森公立大学)

1. 大会プログラム

2021年9月5日(日) 9時20分～16時40分 オンライン開催 (Zoom ミーティング)

9:20 開会 開催校挨拶

9:30～11:30 自由報告部会 (Zoom 上で2つのセッションが同時進行)

(報告要旨は下記3参照)

第1分科会 「震災・難民」 司会：滝田 祥子 (横浜市立大学)

- ・ 王 石諾 「福島原発事故経験者としての在日中国人の女性のライフストーリー」
- ・ 佐久川 恵美 「『徹底的に絶望する』ところから福島原発事故を捉えるー福島県会津若松市における不安を語り合える場づくりを通してー」
- ・ 林 貴哉 「在日ベトナム系移住者の生活の中でのことばをめぐる経験」
- ・ 沼田 彩誉子 「神戸生まれタタール移民2世と1950～1960年代イスタンブルー『理想の国民像』の相対化を目指して」

第2分科会 「戦争・植民」 司会：人見 佐知子 (近畿大学)

- ・ 伊吹 唯 「地域社会によるオーラル・ヒストリーの継承の可能性と限界ー『下伊那のなかの満洲』の事例から」
- ・ 木川 剛志 「戦後混乱期横須賀に生まれた混血児のライフストーリーを描いたドキュメンタリー映画の学術的意味について」
- ・ 山本 唯人 「戦争体験の継承とフィクション物語ー『余白』の文脈形成機能に注目して」
- ・ 橋場 紀子 「韓国人被爆者の語りから、多様な『被爆者像』を考える」

12:00～13:00 総会

13:30～16:30 シンポジウム兼研究実践交流会 (詳細は下記2参照)

16:30～16:40 閉会 会長挨拶、開催校より

2. シンポジウム兼研究実践交流会

「東日本大震災被災地域住民の語りと聴いて伝える活動」

◎プログラム

司会：小林多寿子 (研究活動委員)

●趣旨説明とスピーカー紹介 橋本みゆき (研究活動委員)

●語りの現場からの報告 (各20分)

1. 青木淑子 「語り人活動の意義と活動を通して描く富岡の未来」
2. 坂口奈央 「復興の中の葛藤、苦悩ー地域の語りと生活者の論理」
3. 小林 孝 「伝承館が語り伝えたいこと」

●コメント (各20分)

- ・関根慎一：報道の立場から。福島の被災地域の複合的な全体状況を見渡して。
- ・大門正克：研究者として。東日本大震災被災地でのフォーラム開催の経験をふまえて。

●報告者およびコメンテーターとフロアの質疑応答（15分）

●休憩

●研究実践交流会（45分）

- ・手順の説明・グループ分け（グループは主催者が割り振ります）
- ・ブレイクアウトセッション
- ・全体で発表

●閉会

◎趣旨

東日本大震災から10年。被災各地において、複合的な被害や防災にかんする学術調査研究、復興まちづくり実践が重ねられてきた。しかし地域社会としての自律性回復や住民の生活再建は、むしろこれからが本番である。とりわけ、原発事故によって長期にわたる住民避難を余儀なくされた地域は、今なお段階的帰還の過程にある。そうした地域で、地域に思いを寄せて住民の語りを聴き、調査研究や実践に関わってきた人びとがいる。その「語り」は、当該地域に対する外部からの内在的理解を助け、また地元の復興に資することができるだろうか。

本企画は、被災地における語ること・聴くことへの関心から立ち上げた。しかし震災に話題を限定することなく、さまざまなフィールドで研究・実践する JOHA 会員・参加者が、経験したことを共有し意見交換することを通じて、互いに学び合う機会としたい。

そこでまず、福島県富岡町・双葉町、岩手県大槌町で、住民（避難者や地域外参加者を含む）に語ってもらう活動に取り組んできた3つの実践報告をうかがう。そしてこれを受けて2人のコメンテーターに、震災をめぐる語ること・伝えることの現状についての話題提供と、それぞれの視点からの示唆をいただく。これらを触媒として、大会参加者は、各自のインタビューや発信活動の経験や思いをもちより、小グループに分かれて語らう。たとえば、現地の人々やその語りにもどう関わろうとしているか。現地で聴くおもしろさあるいは逆に難しさを感じた経験。生活史をもとに発信することにより地域に還元したい／懸念されるのはどんなことか。そのケースに特有なのか、それとも語りに広くみられる事柄なのか。実践・研究交流するなかで、参加者それぞれの出発点・現在地・向かう先が少し明るく照らされる機会になれば、幸いである。

問合せ先：研究活動委員会（橋本みゆき、5522825(at)rikkyo.ac.jp）

◎スピーカーのプロフィール

- ・青木淑子さん

NPO 富岡町 3.11 を語る会 代表 <http://tomioka311.com/>

もと福島県立富岡高校校長。語る会で多彩な活動を展開するほか、さまざまな団体と連携。

- ・坂口奈央さん

JOHA 会員、日本学術振興会 PD（国立民族学博物館）

論文に、「漁業集落に生きる婦人会メンバーによる行動力とその源泉：遠洋漁業に規定された世代のライ

フヒストリー」東北社会学研究会『社会学研究』105: 33-60 (2021)など。

・小林孝さん

東日本大震災・原子力災害伝承館副館長。県職員としてさまざまな部署を歴任。

・関根慎一さん

朝日新聞記者。大震災後、特別報道部や政治部等で原発関連の取材に携わる。2019年から福島総局員。

・大門正克さん

JOHA 会員、早稲田大学教育・総合科学学術院特任教授（歴史学）。著書に『語る歴史、聞く歴史：オーラル・ヒストリーの現場から』（2017、岩波書店）、共著に『「生存」の東北史：歴史から問う 3・11』（2013、大月書店）、『「生存」の歴史と復興の現在：3・11 分断をつなぎ直す』（2019、大月書店）ほか。9月下旬に陸前高田フォーラムを開催予定。

3. 自由報告部会要旨

- 「震災・難民」と「戦争・植民」の2つの分科会を Zoom 上で同時開催します。当日選択してください。
- 各報告 20 分・質疑応答 10 分で、合計 30 分を予定。
- 配布資料は各報告開始時にチャット機能から配信します。（途中参加だと受取れない場合があります。）
- 質問やコメントは、チャットに送信（随時）、または 10 分の質疑応答時間に Zoom 上で直接発言していただけます。活発なご参加をお願いします。

研究活動委員会（山本恵里子 sk319189(at)mail.doshisha.ac.jp）

【第1分科会】「震災・難民」（9:30~11:30）

「福島原発事故経験者としての在日中国人の女性のライフヒストリー」

おう せきだく
王 石諾（大阪大学人間科学研究科・博士後期課程）

東日本大震災及びそれに起因する福島原発事故は、特に現地に住む人々に甚大な被害もたらし、10年経った現在においてもそれに関する議論は盛んである。報告者は福島県に現地調査を行った際、現地の在日中国人の中で、国際結婚で移住してくる中国東北地方出身の女性が圧倒的に多いことに気づいた。彼女らの語りに耳を傾けることを通じて、故郷に留まらない理由、日本語を話せず移住してくる記憶から、福島原発事故の経験、日中の境界にさまよう内面的な動きまで、戦争歴史の残響及び予測不可能な災害事故のリスクを織りなすライフヒストリーを感じ取った。本報告は、こうしたマクロな歴史描写で見逃されがちな移住者女性の視点から、個々人から捉える災害リスクを描写する試みである。

『徹底的に絶望する』ところから福島原発事故を捉えるー福島県会津若松市における不安を語り合える場づくりを通してー

佐久川 恵美（同志社大学大学院 博士後期課程）

東京電力福島第一原子力発電所の事故は 10 年目を迎え、避難、健康影響、廃炉といった課題が山積するなか、復興政策がすすめられている。復興政策において、原発事故や放射線被ばくによる健康影響への不安は払しょくする対象であり、人々を苦しめているのは放射線そのものではなく、知識不足から生まれる偏見・差別だと説明されている。不安を語ることすら憚れる状況下で、福島県会津若松

市に暮らしている A さんは「徹底的に絶望するところから、この局面に立ち向かわないと」と語った。本報告では、「徹底的に絶望する」という言葉に込められたものを考察し、不安を語り合うことのできる場づくりをとおして、福島原発事故に遭っている自分たちにとっての「現実」を捉えようとする営みを明らかにする。

「在日ベトナム系移住者の生活の中でのことばをめぐる経験」

林 貴哉（立命館大学授業担当講師）

本発表では、難民として来日したベトナム系移住者を対象に、当事者の視点からことばをめぐる経験を明らかにする。定住開始前に実施される日本語教育が短期間であることに加え、定住開始後に日本語を学ぶ機会も限られていた。そのため、学齢期を過ぎてから定住生活を開始したベトナム系移住者に関しては、日本語習得の不十分さが問題点として指摘されてきたが、これは、暗黙裡に日本語母語話者が規範とされている等、ホスト社会からの視点にとどまっていた。本発表では、ベトナム人集住地域での参与観察や半構造化インタビューの結果をもとに、ベトナム系移住者の経験を分析することで、移住者にとっての生活の中における言語の意味づけを理解することを試みる。

「神戸生まれタタール移民 2 世と 1950～1960 年代イスタンブル—「理想の国民像」の相対化を目指して」

沼田 彩誉子（東洋大学アジア文化研究所客員研究員）

1917 年ロシア革命を機に、ヴォルガ・ウラル地域から旧満洲、朝鮮半島、日本へ避難したテュルク系ムスリムがいた。彼ら「タタール移民」は、戦前日本の大陸政策における「イスラーム工作」に取り込まれたことで知られる。本発表ではまず、従来の研究で看過されがちだった第二次世界大戦後の時期について、トルコや北米へと移住した彼らが、複数の「故郷」を創出したことを示す。次に、神戸出身の女性に焦点を当て、幼少期にイスタンブルへと渡った彼女が、移動によって生じた経験を参照軸に、移住先社会を相対化する姿を描きだす。ただ一つの場所との結びつきを想定しない／できない極東生まれの 2 世は、「理想の国民像」を抛り所に移民の善悪を判断する社会的多数派とどう向き合うのか。歴史のうねりと交差しながら揺らぐ国民概念を、2 世の視点から位置づけることを目指す。

【第 2 分科会】「戦争・植民」(9:30~11:30)

「地域社会によるオーラル・ヒストリーの継承の可能性と限界—『下伊那のなかの満洲』の事例から」

伊吹 唯（熊本保健科学大学保健科学部共通教育センター/医学検査学科助教）

本研究では、長野県飯田市において市民が発足させた「満蒙開拓を語りつぐ会」（以下、「語りつぐ会」）によって行われた中国帰国者への聞き取り活動を再評価することを目的とする。「語りつぐ会」の活動とその成果として刊行された全 10 集の聞き取り集は、地域社会における歴史実践、市民による歴史の継承の取り組みとして評価されてきた。本報告では、「語りつぐ会」の活動終了からおよそ 10 年が経過したこともふまえて、「語りつぐ会」以外の中国帰国者への聞き取り活動（例えば、中国帰国者支援・交流センターによるものなど）を参照しながら、「語りつぐ会」による活動とその成果の特徴や意義を

再検討し、残された課題についても検討することを目指す。

「戦後混乱期横須賀に生まれた混血児のライフストーリーを描いたドキュメンタリー映画の学術的意味について」

木川 剛志（和歌山大学観光学部教授）

発表者(木川剛志)のもとに Facebook を通じてメッセージが届いた。「木川信子を知っていますか?」。送り手はアメリカに住む女性で、彼女の母は 1947 年横須賀に混血児として生まれ、1953 年に養子縁組で渡米した。日本名は木川洋子、その実母の名前が信子だった。同じ名字の Kigawa であれば何か知っているのではと、実際には無関係の木川剛志にメッセージは送られてきた。発表者はこの縁から木川信子の消息を探するために横須賀を調査し、住民から話を聞き、洋子が養子縁組に至った当時の歴史背景を聞く。そして、洋子の 66 年ぶりの帰国を支援し、その模様をドキュメンタリー映画に収めた。このドキュメンタリー映画の学術的意味を探る。

「戦争体験の継承とフィクション物語—『余白』の文脈形成機能に注目して」

山本 唯人（法政大学大原社会問題研究所）

本報告では、東京大空襲体験者の半生を描いた演劇作品『魚の目に水は映らず』（2019 年 3 月上演、作・演出きたむらけんじ）を題材に、戦争体験の継承に、フィクションとして創作された物語作品が果たす役割について検討する。リクール=小林多寿子の議論をもとに、体験の継承を、「語り」に媒介された世代間の学習的な解釈の過程と捉えると共に、フィクション物語における「余白」の文脈形成機能に注目したイザナーの読書行為論を参照し、フィクション物語が提示する仮説的文脈を、適切な批評や関連資料の収集と結び合わせることで、戦争体験理解の充実につながる可能性を指摘する。

「韓国人被爆者の語りから、多様な『被爆者像』を考える」・

橋場 紀子（長崎大学多文化社会学研究科博士課程）

植民地下の広島・長崎で被爆し、戦後、朝鮮半島に帰国したものの 60 年余り被爆者援護の枠外に置かれた韓国人被爆者に関する先行研究は少ないが、本報告では、最晩年まで被爆体験を語らず、韓国南部に暮らし 100 歳で亡くなった姜正守さんご夫婦の証言に焦点をあてる。市民活動の記録やジャーナリストらの報道などでは、韓国人被爆者は「恨（ハン）」の思いを一生、持ち続けたとされてきた。しかし、本報告ではその通説とは異なる韓国人被爆者像が存在することを明らかにする。具体的には 2 人がこれまで沈黙を守った経緯やその理由に関する「語り」、他の韓国人被爆者との語りの相違点に注目する。姜さん夫妻の被爆体験は、他の韓国人被爆者と異なり植民地政策への批判はなく、広島における生活への思い出などが多く含まれる。一方で、被爆者が語っていないこと、あるいは聞き手に伝わっていないことの存在を改めて示し、被爆体験や植民地下での朝鮮半島出身者の生活の多様性を表そうとするものである。

Ⅱ．理事会報告

1．第9期 第6回 JOHA 理事会 議事録

日時：2021年6月6日（日）13：00～17：40

場所：オンライン開催

出席：赤嶺淳、矢吹康夫、上田貴子、石川良子、今野日出晴、佐野直子、塚田守、根本雅也、橋本みゆき、能川泰治、安岡健一、山本恵里子、佐々木てる

欠席：野入直美、小林多寿子

議事録作成：矢吹康夫

1. 前回議事録・議事録記載者確認

確認した。

2. 会長から

ハイブリッドでの開催は断念するが、昨年の経験を活かし対応していく。

3. 編集委員会報告

・11本投稿、1本不受理、10本を審査、再査読6本。査読3回制を試験的に進めている。

→教育的意義で査読を3回にしたが、そこまでする必要があるのかという査読者からの意見もあった

・書評5本。

・特集：第18回大会プレ企画「コロナ禍の「声」を記録する」。編集委員会主催ワークショップ「良い論文を書く」、研活ワークショップ「現地と作品をつなぐ」。

・広告の依頼：理事等からそれぞれ依頼し、メーリングリストでシェアする。8月中旬まで。

・編集委員会のアルバイトは2021年度予算に計上。ワークショップのテープ起こしも2021年度予算

4. 研究活動委員会・大会開催校報告

4.1 6月シンポジウム

・オンライン形式で福井に拠点会場を設置。ITサポーターを2名に依頼。

・リハーサル交通費込み

・Zoom参加の手引きをHPで公開

・資料をGoogleドライブにアップロードして参加者に共有

・会誌18号の特集として原稿化。原稿締切は次期理事会承認後の10月頃。要約的なテープ起こしだと割高になる

- 逐語起こしを本人が校正するほうがよいのではないか
- ページ数を抑えるために要約をする必要はない
- リハーサル時に講演者の意向を確認する
 - ・6/14 に実施するリハーサルの旅費も計上
 - ・昼食、飲み物、コピーなどの雑費はどうするのか
- 小会議室での飲食のリスクを考慮する必要がある
 - ・理事は広報に協力。非会員でも参加可能
 - ・HP 更新「参加費無料、非会員でも参加可能」を追記

4.2 第19回大会

- ・ハイブリッド開催を予定していたが、不確定要素が多いため昨年と同様、オンラインでの開催を提案。研究報告は1日でまとめる、参加費無料を実施する、アルバイト1~2名
- ・開催を1日にまとめることを検討
- ・自由報告部会：個人報告8本。4報告2部会。2部会を同時進行の可能性も検討。現地報告の希望者2名の意向確認。自由報告部会の主担当は山本
- 報告形態の意向確認は早急に行い、報告数が確定次第形態を決定
- 昨年度大会は、技術的なサポートのアルバイト1名。Zoom契約2ヶ月。
- ・研究活動委員会企画案「東日本大震災被災地域住民の語り、聴いて伝える営みの意味」
- ・報告、コメント、グループワーク、全体共有で3時間
- 大会を2日にしてもかまわないのではないかと。あるいは、1日にまとめるならば自由報告部会を2部会並行で走らせる
- 4日 理事会。5日 930-1130：自由報告部会2、1200-1300：総会、1330-1630：研活企画
- コメンテーター候補：小林、大門
- ・開催日程・形態の変更について会員MLとHPで周知する

5. 広報委員会報告

- ・ニューズレター原稿は7/20締切

6. 会計報告

- ・2020年度決算。大会参加費がない。オンラインのため会議費・交通費の支出がない。
- ・2021年度予算案。大会、シンポ、WS参加費収入がない。
- ・学会誌費：編集補助アルバイト、特集記事テープ起こしなど学会誌作成のための経費を含む
- ・研究活動費：コロナ禍以前のように年2回の研活主宰行事が増える、かつITサポートのアルバイトも必要なので、増額した
- ・3年間未納退会者の確認

7. 事務局報告

- ・会員異動

→確認した

- ・理事選挙結果報告

→確認した

- ・シンポジウムの共催依頼

→承認した

・事務局資料のうち、入会申込書以外の紙媒体のもの（理事会資料、総会議案、ニューズレターなど）をPDF化して、紙は廃棄して時期事務局に引き継ぐ

8. その他

- ・日本オーラル・ヒストリー学会奨励賞。学会誌の質の向上と投稿者のインセンティブになるように

- ・以下のような意見が出された

→非会員だったときに刊行されたものも対象とするのか

→他学会では創設した初年度だけ例外の規定としているところもある

→毎年ではなく、2年ごとの学会もある

→論文は他の媒体に発表されたものも可とする学会もある

→自学会に掲載された論文は無条件で候補とし、他の媒体に発表されたものは会員による推薦を必要としている学会もある

→毎年ではなく数年に1度にするならばJOHAに投稿された論文のみを対象とする

→論集に掲載された論文も対象とする

・2年に1度とする。出版時の年齢とする。推薦委員はなし。初年度のみ4年前までとする。論文はJOHAに掲載された投稿論文とする。

- ・若手研究者の顕彰を目的とし、そこから漏れるものについては別の形での表彰を検討

- ・賞状と学会大会での表彰式。招待講演または学会誌での受賞作の紹介。年齢の確認方法は別途考える

- ・終身会員の創設については、次期理事会に引き継ぐ

次回理事会

日程：2020年9月4日（土）13:00～

Ⅲ. シンポジウム・ワークショップ報告

1. シンポジウム「戦争体験に関わる「二次証言」の可能性—福井県の歩兵第三六聯隊に所属した一農民の体験を事例に考える—」について 報告

6月27日（日）に、上記タイトルのシンポジウムを、歴史学研究会現代史部会と同時代史学会との共催で、ズームを用いたオンライン研究会方式で開催した。ここでいう「二次証言」という表現は、当事者

ではない人が当事者から聞いたことを伝える証言という意味で、あくまで仮称として用いるものである。戦争体験者（特に出征経験者）が自らの体験を直接語ることが次第に困難になりつつある昨今、その近親者などによる戦争体験を語り継ぐ活動が注目されつつあるが、その意義と可能性について、実際に語り継ぐ活動をされている方の基調講演と、日本近現代史研究者によるコメント・討論という二部構成の企画で考えようとした。

具体的には、福井県の鯖江に衛戍していた陸軍歩兵第三六聯隊に所属して、日中戦争が勃発したときに中国に出征した山本武さん（1913～1984）の戦争体験を取り上げた。まず武さんの長男である富士夫さん（1940年生まれ）が「父・山本武の戦争体験を語り継ぐ」というタイトルで、続いて五男である敏雄さん（1949年生まれ）が「父・武の戦争を語り継ぐ」というタイトルで父の戦争体験を語ってくださった。富士夫さんは、福井大学の教授だったころから中国で父の戦争体験について講演し、国際交流に努めてきたエピソードを交えながらお話しして下さり、敏雄さんは、武さんが亡くなるまで一緒に暮らしてきた家族として、武さんから直接聞かされたことを交えて語ってくださった。お二人の立ち位置には違いがあったが、武さんが書き残した陣中日記と従軍記録の記述を紹介しながらその戦争体験を伝えようとしていること、そして武さんが普段から口にしてきた「戦争だけは絶対にするな」という言葉を広く伝えたいという思いは共通していた。

お二人の講演終了後は、まず吉見義明さんが「山本武さんの戦争体験の継承の問題をめぐって」というタイトルでコメントし、お二人の活動にはアジアに対する加害の問題について真摯な検討が行われていること、そして日本の遺族会や中国の南京でも語り継ぐ活動を行ったことを高く評価した。次に中村江里さんが「戦争体験に関わる『二次証言』の可能性」というタイトルでコメントし、お二人の語りは陣中日記などの一次史料や武さんの証言に基づく二次的な証言であるが、聞く側の関心を「武さんは家族にどのような戦争体験について、どのような様子で語ったのか」などの問いに変えると、家族はその現場にいた当事者になり、一次証言にもなるということ指摘し、さらにジェンダーを考える視点で、お二人の活動の意義や課題についても指摘された。最後に能川委員からも、担当するゼミの取り組みとしてお二人から聞き取りをさせていただいた立場からのコメントが披露され、お二人の活動には、戦争責任についての理解と当事者意識が希薄な若い世代に刺激を与えていること、今後はお二人の活動を支えてきた関係者からの聞き取りをふまえた「語り継ぐことの戦後史」を描くことが課題になることが指摘された。コメント終了後に全体討論が行われたが、そこでは父の戦争体験を語り継ぐことへのお二人の思い、二次的証言の意義と可能性、証言を聞いた私たちは何をすればよいのか等の論点をめぐって活発な議論が展開された。総じて、とても有意義な内容のシンポジウムであった。

なお、当日の参加者は開始から終了までに若干の変動があったが、100名前後であった。また、このシンポジウムの内容は2022年に刊行される会誌18号に掲載される予定である。

（研究活動委員会 能川泰治）

2. オーラル・ヒストリー複合ワークショップ2021「作品と現地をオンラインでつなぐ」『語り継ぐ いおか津波』の現場を訪ねて 報告

コロナ禍のためやむなく延期したワークショップを、1年後の2021年3月14日、ようやく実現できた。JOHAスタッフ（アルバイトを含む）および受入NPO（4名）以外の参加者は、現地訪問1名（会

員)、オンライン参加3人(うち会員1名)とかなり少人数であったが、たいへん充実した内容となった。

開催地となった千葉県旭市飯岡は、2011年3月の東日本大震災において県内の津波犠牲者が集中した地域である。地元NPO法人「光と風」は、震災以後、さまざまな形で復興まちづくりに取り組んできた。その事業の一環として、地域被災者への聞き書き記録集『語り継ぐ いいおか津波』(初版2012年5月)を刊行し、取材相手の似顔絵をカットに入れた「復興かわら版」(現在も継続中)も発行している。

ワークショップは次の日程で行なった。まず午前中、飯岡の震災被害と震災後の歩みについて、NPOの船倉さんの案内により車で飯岡町内を回りながら説明を受けた。昼食休憩をはさみ、午後は刑部岬の展望施設に設けられた集会室から、ウェブ会議ツール Zoom を使って会場の様子を配信。語り部として活動する高橋さん、そして、聞き書き集やかわら版のため聞き書きをされてきた渡邊さんにお話をうかがい、そのほかNPOの紹介や、飯岡の地域資料を見せていただくなどした。オンライン参加者はZoom画面の向こうから質問したり自らの活動について発言したりした。また現地訪問参加者の川崎さんに、午前の地域まわりで撮影した現在の町内の様子や震災遺構について写真報告をしてもらった。

前日の悪天候とは打って変わって当日は好天に恵まれた一方、コロナ禍による緊急事態宣言発令期間が延長された中での開催となった。そんな状況下での事前準備・当日作業では、受入側および機材・接続担当スタッフも通常以上の負担があったことだろう。また移動を伴う企画ということで配信開始が予定よりも遅れる一幕もあった。しかし参加者アンケートに寄せられたいくつもの声から、飯岡のみなさんの実践の積み重ねやオーラル・ヒストリーが何かを開く可能性について、共に学ぶ場になったことを確認できた。

渡邊理事長をはじめNPO光と風のみなさま、また現地・オンライン参加されたみなさま、ありがとうございました。

(研究活動委員会 橋本みゆき)

3. JOHA 編集委員会主催ワークショップ『『良い論文』を書く』報告

第8期JOHA編集委員会は学会誌の質の向上を課題に活動を行ってきた。本誌への投稿数は安定しており、毎年5本前後の論文を掲載している。だが、その一方で論文としては不備のある投稿も目につく。たとえば、問いが明確でない、先行研究が十分に提示されていない、語りと解釈が噛み合っていない等の問題点が挙げられ、内容以前に投稿規定および執筆要領に従っていないものも少なくない。おもな投稿者は大学院生などの若手会員であり、論文の基礎を理解できていないことが要因として考えられる。そこで、今期編集委員会では『『良い論文』を書く』と題するワークショップを企画した。ただし、一般的な解説に終始するのであればJOHAで主催することの意味は薄れるため、このワークショップでは語りの扱いに重点を置くことにした。

今回は若手会員に未発表の原稿を題材として提供してもらい、どうすれば「良い論文」になるのか参加者全員で3回にわたって検討した(第1回は2020年11月8日、第2回は同年12月27日、第3回は2021年2月11日に開催)。参加者は編集委員5名と若手会員9名(うち題材提供者は2名)である。また、本ワークショップを公開査読として位置づけ、編集委員は査読者の立場から原稿にコメントするとともに、査読するときのポイントについても解説を行った。最終的に1本が採択され、9月下旬に刊行予定の『日本オーラルヒストリー研究』最新号に掲載が決まった。同号に編集委員のコメントと

参加者のフィードバックをまとめた報告も載せるので、詳細はそちらを参照していただきたい。

なお、『日本オーラルヒストリー研究』第18号の投稿締切は2022年3月を予定している。投稿を考えている方は投稿規定・執筆要領を熟読し、執筆作業を進めていただきたい。

(編集委員会 石川良子)

IV. お知らせ

1. 会員異動 (2020年12月14日～2021年6月6日)

(1) 新入会員 (入会順)

西本陽一 金沢大学人文学類

林 亜美 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 ジェンダー学際研究専攻博士後期課程

山岸蒼太 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程

小松恵 立教大学大学院社会学研究科 博士後期課程

佐川祥予 静岡大学・教員

福本晋悟 株式会社毎日放送 アナウンサー室

橋場紀子 長崎大学多文化社会学研究科 博士後期課程

籠島政江 筑波大学大学院人間総合科学研究科看護科学専攻

中原ゆかり 愛媛大学 教授

安田美予子 関西学院大学人間福祉学部

下條尚志 神戸大学大学院国際文化学研究科 准教授

木川剛志 和歌山大学観光学部・教授

朴 歆 東北大学環境科学研究科大学院生

(2) 退会

小林久子、朴仁哲、飯塚 彬、内山明子、川上幸之助、ジョンソン・グレゴリー、関根里奈子、田野綾人、野口憲一、藤井和子、湯山英子、市川由希子、門野里栄子、藤川杏奈

(事務局長 矢吹康夫)

2. 2021年度 (2021年4月1日～2022年3月31日) 会費納入のお願い

平素は、学会運営へのご協力をありがとうございます。本学会は会員のみなさまの会費で成り立っております。今年度の会費が未納の方におかれましては、ご入金の日ほどよろしくお願ひいたします。

会費のご納入につきましては8月末日までにお願ひしたく存じます。学会誌の一斉発送の時期を過ぎますと、ご納入確認がとれた後に、個別に学会誌発送手続きをとらせていただくことになってしまいま

す。ご理解のほどよろしくお願いいたします。

また、一部ですが 2020 年度分、2019 年度分についても未納の会員さまがいらっしゃいます。こちら
も早めのご納入をよろしくお願いいたします。

なお、所属機関名義で振り込まれる場合は、別途、会計宛に入金した旨をご連絡ください。

■年会費

一般会員：5000 円 学生・その他会員：3000 円

*「学生・その他会員」の「その他」には、年収 200 万円以内の方が該当します。区分を変更される場
合は、会費納入時に払込票等にその旨明記してください。

*年会費には学会誌代が含まれています。

■ゆうちょ銀行からの振込先

口座名：日本オーラル・ヒストリー学会

口座番号：00150-6-353335

*払込取扱票（ゆうちょ銀行の青色の振込用紙）の通信欄には住所・氏名を忘れずにご記入ください。

*従来の記号・番号は変わりありません。

■ゆうちょ銀行以外の金融機関から振り込む際の口座情報

銀行名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：9900

店番：019

店名（カナ）：〇一九店（ゼロイチキュウ店）

預金種目：当座

口座番号：0353335

カナ氏名：（受取人名）：ニホンオーラルヒストリーガツカイ

郵便払込・口座振込の控えで領収書に代えさせていただきますので、控えは必ず保管してください。必
要に応じて、個別に領収書も発行させていただいておりますので、その際にご連絡下さい。その他、学会
会計全般についてご質問等ございましたら、会計担当の上田（uedanota (at) kindai.ac.jp）までお問い合
わせください。

（会計 上田貴子）

3. 訃報：宮崎黎子さん

第 6 期理事を務められた JOHA 会員の宮崎黎子さんが、6 月 30 日、ご病気のため急逝されました。元
JOHA 会長の清水透さんに追悼文を寄せていただきました。

=====

JOHA の飲み会で、たまたま同席させていただいたのが、宮崎さんとのその後の二つの流れのお付き

合いの切っ掛けでした。そのひとつが JOHA と地域女性史関係。JOHA では若手研究者の自主性を盛り立て、新鮮な若手の企画力を引き出そうと企画した定期的なワークショップ、あの企画の主旨を十分ご理解いただき、しっかりと若手研究者を支えつづけてくださいました。オーラルヒストリー総合研究会、地域女性史研究会にお招き下さり、女性史の分野に疎かった、僕の目を開いてくださったのも宮崎さんでした。

既成アカデミズムや権威主義の弊害を意識しながらも、正面から批判するのではなく、坦々と地域女性史の方法を追究しつづける宮崎さんには、いつも僕の方法・研究者世界での僕の立ち位置と重なるものを感じていました。

もうひとつが、オーラルヒストリーとは関係のない歌の世界。ソロ・ライブに数回、ゲストとしてお招き下さり、人前で歌う貴重な機会をいただきました。宮崎さんの中・高音の発声のすばらしさと、人のこころを包み込むようなやわらかな歌声には、心魅かれるものをつねに感じておりました。そしてコロナ騒ぎで一年延期になった今年3月「トーク&ライブ—伝えたい<いのち>」。ノン・フィクション・ライターとして知られる向井承子さんとお引き合わせ下さり、企画から当日の司会進行まで、すべてお世話になりました。この分野でも、もちまへの企画力と実行力をいかに発揮してくださいました。

OH 総合研究会、地域女性史研究会をはじめ、オーラルヒストリー研究、そして歌の世界でも、宮崎さんは最後まで現役を貫かれました。「そろそろ、もういいか」との思いが時折もたげる僕に、宮崎さんの生き方はブレーキをかけてくれる。これからもまだまだお付き合いいただきたかった。その本音に変わりはありませんが、生き切った宮崎さんに、そんな愚痴はやめにしましょう。ライブで歌ってくださった「いのちの歌」の一節「出会いは大切な宝物、この命にありがとう。」この言葉を今、宮崎さんに捧げます。「え！私のための追悼文？そんなのやめてよ、恥ずかしい！」控えめな宮崎さんの声が聞こえてくるようです。(清水透)

===

宮崎さんは生前、足立区女性史編纂などに携わられ、ご編著『橋浦家の女性たち——オーラル・ヒストリー』(共編、2010年、ドメス出版刊)などの作品を残されました。心より、ご冥福をお祈りします。(橋本みゆき)

.....

日本オーラル・ヒストリー学会

Japan Oral History Association (JOHA)

JOHAニューズレター第40号
2021年8月10日
編集発行：日本オーラル・ヒストリー学会

JOHA 事務局

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1

立教大学社会学部矢吹康夫宛

日本オーラル・ヒストリー学会事務局

E-mail joha.secretariat(at)ml.rikkyo.ac.jp

* 郵送またはメールでのご連絡をお願いいたします。
